



# 木村素衛の教育思想研究—京都学派の戦後思想の一射程—

田口, 玄一郎

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2020-09-25

(Date of Publication)

2021-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7831号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007831>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 論文内容の要旨

## 論文題目

木村素衛の教育思想研究—京都学派の戦後思想の一射程—

本研究の目的は、京都学派の木村素衛（1890年3月11日・1946年2月12日）の教育思想に足場を置いて、戦後の京都学派の思想と比較しながら、今日におけるその展開可能性を問うことである。

本研究の全体は四部に分かれ、全七章から構成されている。

本研究は大別して以下三つのアプローチ方法に基づいている：第一に、木村教育学の分析対象を主に『国家に於ける文化と教育』（以下、『国家』）に限定すること。第二に、『国家』において展開された木村の国民教育論と教育人間学の双方の課題と可能性を今日的観点から批判的に検証すること。第三に、木村教育学を思想史的スケールのもとで再評価すること。

近年わが国の教育学研究では木村素衛の思想が再評価されているが、それには二重の意味がある。第一に、戦後から約40年間ほとんど顧みられることがなかった木村の思想が、1980年代後半の先駆的な研究成果により次第に積極的に評価されつつあるという一面がある。第二に、昭和16年から終戦までの時期に構想された木村晩年の大著『国家』に代表される木村国民教育論に対して従来否定的かつ消極的に評価されてきた一面がある。今日では上記の積極的と消極的との間の「評価の二重性」に木村教育学は立たされており、こうした現状を踏まえて今一度木村の教育思想、とりわけ『国家』における国民教育論とは何であったのか、また今日の視点からみてそこにどのような課題と可能性があるのかを批判的に検証することが課題となっている。これは同時に、木村の国民教育論のみならず、『国家』の中で別に展開された教育人間学に対しても同様であり、『国家』全体の再評価は両者の対等な再評価によってはじめて可能となる。

第一と第二のアプローチ方法に関する以上の前提を踏まえながら、本研究の第二部（第三章と第四章）と第三部（第五章と第六章）はそれぞれ木村の教育人間学と国民教育論を論じたものである。

第三章では Pedagogy（教育学）と「教（をしふーをしへ）・育（そだつーそだて）」の解釈学的地平の上に浮かび上がる木村教育関係論の形式に標準を合わせて、それと柄谷行人（1941）の「教える—

学ぶ」との比較から「子ども」（pais）と「教育指導者」（paidagōgos）の関係性の定式化を目指す。第四章では木村身体技術論を取り上げ、後述するハイデッガー批判と「労作教育」の超克の上にそれがデューイ（John Dewey, 1859-1952）の教育課程論と共通したヴィジョンをもち、教養と仕事の統一的な教育プログラムへの志向があったものとして位置づける。

第五章では『国家』の後半（全五章のうちの終章）から展開される木村国民教育論の原理的考察ではなくその成立背景にあるものを問う。終戦後に木村は「アメリカ教育使節団」を迎える「日本側教育家委員会」のメンバーに任命されたが（その直後に急逝）、ちょうど時期を同じくして、すでに戦中に構想されていた『国家』（第一版）が刊行された。敗戦直後の木村の言説には戦後の「デモクラシイ」への期待を含ませるものがあつた一方で、戦中以来の「世界史的立場」を凌駕するものではなく、むしろそれを戦後の文脈から新たに意味づけていこうとした経緯を確認することができる。続く第六章では木村国民教育論の基本原理である「世界史」と「世界」の連関に焦点を当てる。絶対的な前者の本質に対して「間国民」（international）の交流を支える後者の相対的な本質が問われる次元に木村は積極的に立とうとし、「道」の議論を展開した。もともと、その最終的な行き着く先の「極限」である「平均性」と「一様性」を予示した木村が要請したのは、「道」における国民間の交流如何の方法ではなく、国民の多様性を保障する機関としての「国家」であった。「国家」の一元性と「国民」の多様性の相互連関の可能性を当時木村がどのように考えたのかがここでの争点になる。

『国家』再評価をめぐる問題は、以上の木村自身の内在的な思索のプロセスに沿うだけでなく、より包括的な思想史的スケールに立つ視座を必要とし、ここに本研究の第三のアプローチの意義がある。

本研究では以下三つの思想史的関連に注目する：第一に、木村の直接の師である西田幾多郎（1870-1945）と田邊元（1885-1962）との思想的影響関係。第二に、木村が担当した京都帝国大学教育学教授法講座の学統からの影響関係。第三に、自由学園を拠点に活動した戦後京都学派との関係。

第一の点に関しては、まず、木村教育学成立の背景にあつた西田との関係、とくに「意志」をめぐる両者の課題意識がどこに向かったのかを確認する作業に相当する。第一部第一章では、『善の研究』（1911）に代表される西田の初期思想における「意志」がジェイムズ（William James, 1842-1910）の心理学的意志論からの影響とそれからの離反とを同時に内包した概念として提示されたものであつたことを明らかにする。第一部第二章では、西田の中期から後期への転換点に位置する昭和7年（1932）の論文「自由意志」と「教育学について」を通じて、意志の具体的な現われである「行為」の問題が浮上し、これが同年に発表された木村の論文「意志と行為」に共通した問題であつたことを確認する。他方でこのときに西田から呼びかけられた「教育学」の問題は、すでに木村の初期フィヒテ研究を通じて内面的に胎動していた可能性についても考察する。

田邊と木村との関係については、第二部第四章で取り上げる。具体的には、木村身体技術論の特徴の一つである“手”が、田邊のハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976) によるカント解釈に対する批判、すなわちハイデッガーが看過した「身体性」の問題を木村が踏襲しようとした結果であった可能性に焦点を当てる。『国家』の中で「身体」ないし“手”の問題は、近代以降「機械」の登場によってもたらされた人間の主体性の喪失を象徴的に意味する「手持無沙汰」へと向かい、再び人間の主体性を回復するために要請される「手立て」、一言でいえば「計画」と「手段」の重要性へ発展してゆく。

第二の点である京都帝国大学教育学教授法講座と木村との関係については、同講座の木村の前任者であり「労作教育」論でも知られる教育学者の小西重直 (1875-1948) と、かつて小西の許で学び今日京都学派の教育学者として再評価されつつある篠原助市 (1876-1957) との比較から木村教育学の独自性を見定めるための作業に相当する。第二部第三章では木村教育関係論について取り上げ、そこで半ば唐突に登場する「助成」という一見聞き慣れない言葉が篠原によってすでに重視された教育学的概念であったことを掘り起こしながら、両者の教育関係をめぐる捉え方の差異—子どもと教育指導者の関係は有るかどう—を考察する。第二部第四章では、『国家』の中で木村がその身体技術論の教育的展開のための活路を「労作教育」に見出そうとしていた点に注目し、その原点である小西の「労作教育」論に立ち返り、木村が「労作教育」の何を重視しかつ乗り越えようとしたのかを検証する。『国家』の結論で示された「教養教育」から「職分的専門化」への一貫教育プログラムは、「労作教育」にまつわる身体的作業の一元化を超えて、“教養”と“職分”の有機的総合と後者の分化的多様性を保障するものとして木村が最終的に求めたものであり、ギリシャ以来今日まで教育史上の問題として問われてきた「教養教育」(liberal education) と「職業教育」(professional education) の連関に対して一つの可能性を提示している。

最後の第三の点に関しては、木村の文脈からいったん離れて、学校法人自由学園 (以下、自由学園) において戦後京都学派の人びとの多くが直接関わる中で語られた彼らの言説記録に着目し、戦前から戦後にかけての長い文脈の中で語り継がれてきた同学派の教育思想が何であったのかを再評価する視座を形成することに相当する。自由学園は共にジャーナリストであった羽仁もと子 (1873-1957) と羽仁吉一 (1880-1955) の夫妻によって、大正 10 年 (1921) に現在の豊島区に創立された学校である (東久留米市の現在のキャンパスに移転したのは昭和 5 年)。戦後羽仁夫妻が逝去した後、京都学派の教育学者である天野貞祐 (1884-1980) が自由学園理事長に就任した。天野を通じて、戦前から戦後にかけて活躍した京都学派の思想家たちの多くが自由学園に来校し、講義や講演をした内容が『学園新聞』に詳しく掲載されている。本研究はそのすべてを扱うことはせずに、自由学園の大学部である最高学部 (以下、学部) の女子卒業生の“生涯教育”のためにかつて毎年夏に定期的に開催された「女子卒業生夏期

学校」(以下、夏期学校) の講義記録にフォーカスする。歴史学者の鈴木成高 (1907-1988)、精神史学者の下村寅太郎 (1902-1995)、ハイデッガー研究者の辻村公一 (1922-2010) は夏期学校のために「歴史の知恵」、「科学の歴史」、「思索の手仕事」と題する講義をそれぞれ行っており、そこでは彼らの戦後思想の一つの到達点が自由学園の創立以来の教育理念と共鳴しながら語られている。本研究は夏期学校において披歴された彼らの戦後思想と、戦前から戦中の間に大成した木村教育学を比較しつつ、京都学派教育学の戦後における一つの展開が自由学園の“生涯教育”と共に歩むものであったことを明らかにする。

氏 名 : 田口 玄一郎

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 茶谷 直人 教授  
(副) 中 真生 准教授  
(副) 大橋 完太郎 准教授

## 論文審査の結果の要旨

氏名	田口 玄一郎	
論文題目	木村素衛の教育思想研究——京都学派の戦後思想の—射程—	
要旨	<p>本論文は、いわゆる京都学派に属する美学・教育学者として知られる木村素衛（きむら・もともしり：1890-1946）の思想の特長とその現代的意義を、筆者が“木村における教育学的転回”と呼ぶ視座から捉え直すとともに、戦後の自由学園における生涯教育に長く関わった京都学派第二・第三世代の哲学者たち（高山岩男、下村寅太郎など）の講演記録に光をあてることを通じ、西田・木村から戦後の京都学派へと続く“教育学的転回”のさらなる可能性を探ろうとする、大変独創的かつ興味深い試みとなっている。</p> <p>本論文は四部・全七章から構成されているが、その概要・特徴は次の通りである——まず、「はじめに」で筆者は、1980年代後半からの木村哲学再発見の動きには「評価の二重性」があること、つまり、「表現愛」や「手・身体」に照準した制作芸術論・人間学は極めて先駆的で魅力的なものとして評価されつつある一方、戦中の「国民教育論」には否定的・批判的評価が下されているという二面性が認められることを確認し、本論文の目的を、そうした両側面を視野に収めつつ、その教育思想の現代的可能性を総合的に改めて検討・評価することに定位する。</p> <p>第一部「木村教育学成立に関する思想史的試論」は、論文全体の理論的土台ともなっているが、まず第一章「木村と西田の呼応関係（その一）—初期西田の「意志」を中心に—」では、木村の出発点にある「自由意志」をめぐる思想的格闘が、師の西田幾多郎における格闘と並行・呼応しつつなされたことがジェイムズ心理学との関連・差異において、また、続く第二章「呼応関係（その二）—木村教育学の原点」においては、木村がその主著『全知識学の基礎』を翻訳したフィヒテの「意志・自我」論との関連において浮き彫りにされる。従来、木村が西田の推薦を受けて1933年に京都帝国大学教育学教授法講座についた経緯は、木村が戦後間もなく病死してしまったこともあり、たとえば、「木村に教育学は似合わない。西田の温情は、一人の詩人哲学者のいのちを削った」と否定的に捉えられがちだが、本論文は、「木村にとって教育学は師と共に彼自身の中から取り組むべき思想的課題として発見された」のであり、その教育学的転回には内的必然性があつたと論じ、木村研究における新たな視座を提示するものとなっている。</p> <p>第二部は、木村の主著の一つ『国家に於ける文化と教育』（1946刊行／以下、『国家』と略記）前半における「教育人間学の諸相」を主題としている。第三章「木村教育関係論再考」では、木村教育学（pedagogy）は、“子ども”という存在への問いとしてあり、その基本的枠組みは、「教（をしふ—をしへ）・育（そだつ—そだて）」といった日本語彙の解釈学的理解に基づいていることが解明される。</p>	
主査記載氏名・印	茶谷 直人	

さらに第四章では、木村教育学の現代的可能性の中心をなすその身体芸術論・身体技術論が、ハイデガー存在論に対する田邊元による批判に触発された「身体再定位」の試みであったことを思想系譜学的に確認したうえで、「手持ち無沙汰」「手先」「手分け」といった言葉の解釈学的考察と、道具との身体的関係の現象学的考察の融合した分析の現代性を明らかにする。木村は、近代以降の機械化によってもたらされた人間的主体性の喪失を「手持ち無沙汰」の現象に見て取り、人間性を回復するための「手立て」、「計画」の重要性へと議論を展開している。第三章後半に置かれた、柄谷行人による「教える—学ぶ」論との対比や第四章の思想系譜学的考察及び機械文明への処方には飛躍や不十分な点も認められるが、メルロ＝ポンティなどに先駆けて、「感性的なものの中に溶け込んで了っている概念」への問いを基軸にすえた木村の身体論・教育論の現代性が十分に描き出された中心的セクションとなっている。

第三部『国家』後半における木村国民教育論の問題と可能性は、第五章「敗戦後の木村の思想」及び第六章「木村教育論における政治、教育、哲学」によって構成されているが、その題が示している通り、木村教育思想の問題と可能性を考察する。「政治—教育—哲学」を「国家的全体」のもとに位置付けようとする木村の「構想」には、戦中の「国民教育論」の時代的制約が明白であり、また、1946年2月12日に急逝してしまったこともあり、木村の戦後思想は、ほとんど展開されずに終わってしまった。しかしながら、筆者自身は、センやヌスパウムによって主題化された「自由の具体的条件としてのポジティブ・ケイパビリティ」だけでなく、実存的問題状況に関わるネガティブ・ケイパビリティをも視野に収めつつ、教育・政治・哲学の相互関係を考へて行こうとする方向性を示唆している。

第四部「戦後京都学派教育学の—射程—自由学園夏期学校を事例として」は、1957（昭和32）年に自由学園理事長に就任した、京都学派の教育学者・天野貞祐（1884-1980）の招聘によって1960年代から80年代初めにかけて学園を頻繁に訪れた、いわゆる京都学派第二世代の歴史学者・鈴木成高（1907-1988）や科学史家・下村寅太郎（1902-1995）、第三世代の辻村公一（1922-2010）による夏期学校講義などの記録（『学園新聞』収録）をもとに、京都学派教育学の戦後における展開を読み解こうと試みる。この最終セクションは、彼らの思想の紹介に多くが割かれており、木村教育学との関連において十分に説得力ある形で考察されているとは言いが、多様な展開をみせた京都学派を、緩やかな家族的類似を示す「探求の共同体」と捉えるならば、今まで全く論じられて来なかった事実にも光をあてたこの試みには大きな可能性を感じさせるものがあると言えよう。

以上のように、本論文は、いくつかの点において不十分なところが認められるものの、木村素衛の教育思想及び戦後京都学派の展開に関わる研究として、きわめて興味深く斬新な考察を含んでおり、したがって本審査委員会は、論文提出者・田口玄一郎が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

### 審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	茶谷 直人	副査	准教授	中 真生
副査	教授	松田 毅	副査	大連理工大学 客員教授	齋指 信雄
副査	教授	白鳥 義彦			